

(標準様式～裏)

<p>観点</p> <p>1. ニーズの状況変化</p>	<p>● A ○ B ○ C ○ D</p> <p>エダマメ、スイカのオリジナル品種は、生産者、市場関係者の評価が高く、新品種へのニーズはますます高くなっている。ネギも主産地の山本地域から晩抽性で5～6月どり品種等の要望がある。これらは、県のナショナルブランド野菜であり、行政施策上もさらに重要性が増している。</p> <p>メロンは、えそ斑点病抵抗品種シリーズが完成する平成29年度に終了予定である。イチゴは有望系統の選抜が完了した平成27年度で終了した。</p> <p>(委員の意見)</p> <ul style="list-style-type: none"> 嗜好性の強いえだまめやスイカなどは、オリジナル品種の優位性が販売に直結していることから、品種開発に対するニーズは高い。 消費者ニーズに答えるため、周年出荷は重要な課題である。また、高付加価値製品を生む可能性のあるブランド化は、積極的に進めるべきである。 エダマメやスイカなどでオリジナル品種が開発され、支場評価が高まっている実績を受けて、現場や関係団体のニーズは高まっている。 県オリジナル品種の育成は、生産・販売・プロモーションなど新たな取り組みのきっかけとなっており、生産現場からの期待が大きくなっている。 <p>A. ニーズの増大とともに研究目的の意義も高まっている C. ニーズの低下とともに研究目的の意義も低くなってきている</p> <p>B. ニーズに大きな変動はない D. ニーズがほとんどなく、研究目的の意義がほとんどなくなっている</p>														
<p>効果</p> <p>2.</p>	<p>● A ○ B ○ C ○ D</p> <ul style="list-style-type: none"> 平成27年度、エダマメ日本一を達成したが、県内外の関係者から、「オリジナル品種を核とした長期継続出荷は秋田の強み」と評価されており、今後の育種効果も期待できる。 ネギは、品種によって期待される周年出荷の実現や、秋田美人ねぎブランドへの貢献が期待できる。 スイカは、「あきた夏丸チツェ」の評価が特に高く、指名買い、高単価取引されており、「あきた夏丸」のラインナップ強化の効果は大きい。 メロンは、えそ斑点病抵抗の付与で、高品質生産による農家所得の向上や産地拡大が期待できる。 地域特産野菜の育成は、6次産業化や中山間地振興のための地域資源として期待できる。 <p>(委員の意見)</p> <ul style="list-style-type: none"> えだまめの「秋豆シリーズ」、スイカの「夏丸シリーズ」など品種のラインアップ化により、長期継続出荷の実現とともに、量販店等の棚の確保も可能となっている。 ブランド化・周年出荷は農家の収入UPに繋がると期待出来る。 エダマメの100日出荷体制の確立や小玉スイカの「あきた夏丸チツェ」などの普及拡大により、産地拡大と農家所得向上につながっている。 スイカの「あきた夏丸シリーズ」、エダマメの「あきたほのか」等の県オリジナル品種が、生産者、関係団体から県農業試験場の「分かりやすい成果」として認識されている。 <p>A. 大きな効果が期待される C. 小さな効果が期待される</p> <p>B. 効果が期待される D. 効果はほとんど見込めない</p>														
<p>進捗状況</p> <p>3.</p>	<p>○ A ● B ○ C ○ D</p> <ul style="list-style-type: none"> 平成27年度、春どり用の晩抽性一本太ネギ新品種「秋田はるっこ」、根部が紫色の辛みダイコン新品種「あきたおにしほり紫」を育成し、品種登録申請をしており、普及を図る予定である。 平成28年度内にも、メロン等で品種登録申請を予定している。 現地試験段階の系統については、エダマメでは、「秘伝」とほぼ同じ収穫期の系統について秋試18号、秋試20号及び秋試21号について、秋冬どり系ネギでは、秋試交14号について、スイカでは、あきた夏丸系の大玉早生の秋試交19号、小玉系の秋試交20号、秋試交25号、秋試交26号、秋試交27号及びあきた夏丸アカオニの黒皮系の秋試交24号について、加工用ダイコンでは秋試交9号、秋試交10号について栽培が行われ、引き続き現地試験を行い年次変動のデータ取りを行う。 以上のように計画は順調に進んでいる。 <p>(委員の意見)</p> <p>えだまめ、スイカ、辛みダイコン、加工用ダイコンなど、計画どおりに品種開発が進んでいる。一方で、現地での普及に伴い開発品種の耐病性の強化など、後付けの現地の要望も出てきている。品種開発に加えて、後付け要望にも対応するため開発した品種の改良等にも取り組み、販売力を強化した品種開発に取り組んで欲しい。</p> <ul style="list-style-type: none"> 多くの品種が順調に進捗していると評価できる。 四季成りイチゴ、食用ギクの育成も全体計画にあるが、まだ、取組が進んでいないので、今後、生産現場や市場の状況を踏まえた取組を行う必要がある。 <p>A. 計画以上に進んでいる C. 計画より遅れている</p> <p>B. 計画通りに進んでいる D. 計画より大幅に遅れている</p>														
<p>目標達成の状況</p> <p>4.</p>	<p>○ A ● B ○ C ○ D</p> <ul style="list-style-type: none"> オリジナル品種は、品種数、栽培面積が増えて、県内産地にとって必要不可欠なアイテムになっているため、種苗の増殖、供給体制について、関係機関との検討が必要である。 <p>(委員の意見)</p> <ul style="list-style-type: none"> 大きな阻害要因は見当たらない。県外への販売戦略をしっかりと立ててもらいたい。 <p>A. 目標達成を阻害する要因がほとんどない C. 目標達成を阻害する要因がある</p> <p>B. 目標達成を阻害する要因が少しある D. 目標達成を阻害する要因が大きいにある</p>														
<p>総合評価</p>	<p>○ A 当初計画より大きな成果が期待できる</p> <p>● B+ 当初計画より成果が期待できる</p> <p>○ B 当初計画どおりの成果が期待できる</p> <p>○ C さらに努力が必要である</p> <p>○ D 継続する意義は低い</p>														
<p>評価を踏まえた研究計画等への対応</p> <p>ニーズ、効果は高い評価だったので、このままの方針で試験を継続していく。</p> <p>本課題評価の事前評価等で、限られた予算、人員の中で緊急度の高いものから取り組むべきとの指摘を受け、エダマメ、ネギ、スイカを野菜育種の3本柱にして、他の品目は順次、中止、終了する計画に変更した。イチゴは大果で四季成り性の「秋試6号」、「同7号」を選抜して、平成27年度に試験を終了した。</p> <p>食用ギクは、新品種の要望をだした県内市場関係者へのヒアリング、主産地の平鹿地区と伝統野菜「湯沢ギク」の生産者との情報交換をしながら、場内で育種素材の特性調査を進めている段階である。今後も、生産現場や市場の関係者の意見を聞きながら取り組んでいく。</p>															
<p>(参考)</p> <p>過去の評価結果</p>	<table border="1"> <tr> <td>事前</td> <td>中間(年度)</td> <td>中間(年度)</td> <td>中間(年度)</td> <td>中間(年度)</td> <td>中間(年度)</td> <td></td> </tr> <tr> <td>B</td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> </tr> </table>	事前	中間(年度)	中間(年度)	中間(年度)	中間(年度)	中間(年度)		B						
事前	中間(年度)	中間(年度)	中間(年度)	中間(年度)	中間(年度)										
B															